

令和5年産水稻現地指導会資料

令和5年6月10・11日

J Aしまね斐川地区本部 営農第一課

現地指導会次第

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 生育状況 P-1 | 5. 残草対策 P-7 |
| 2. 生育調査結果 . . . P-2 | 6. 穂肥の施用 P-8 |
| 3. 水管理 P-3 | 7. 病虫害防除 P-10 |
| 4. 中干し P-4 | 8. 農薬適用一覧 . . . P-12 |

1.生育状況

1) 育苗

育苗期間は、全般的に気温が高く推移し温度管理が難しい年となりました。

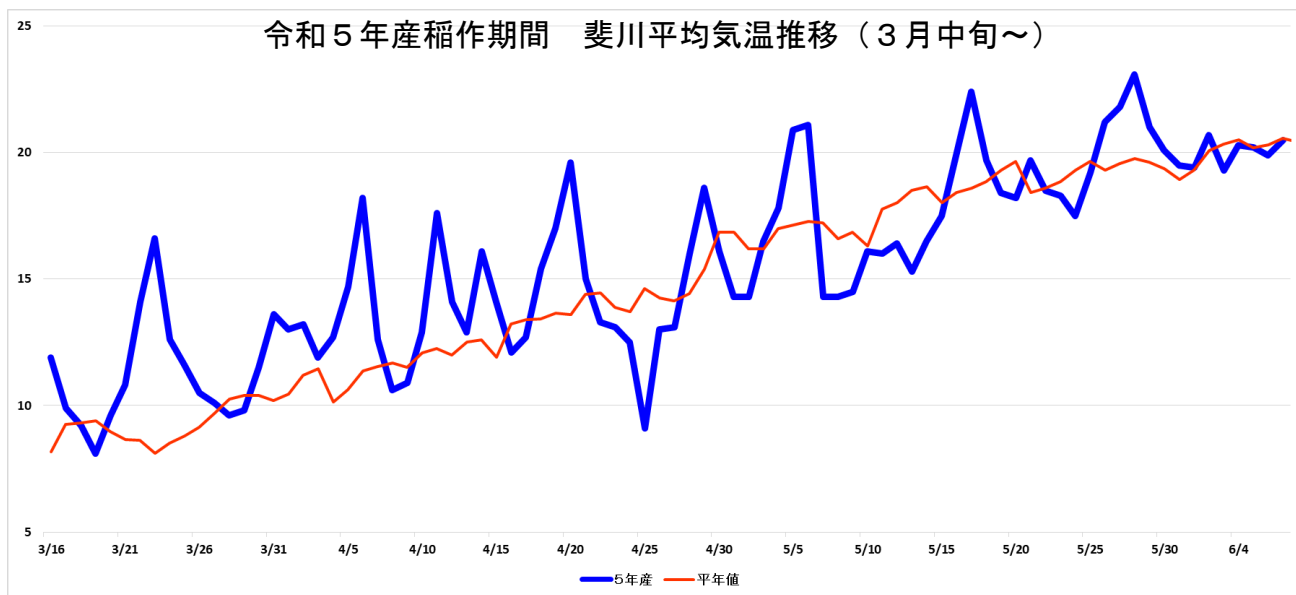
浸種中に発芽するケースや、ハウス内の高温多湿によるもみ枯細菌病や苗立枯細菌病の発生、苗の伸びが早く田植え作業の前倒しなどのトラブルが一部でありました。特に、苗をハウスに広げた直後の高温によるヤケ苗が例年になく多い年となりました。

2) 本田生育

田植え時期の4月下旬から5月は気温の高低差が激しく推移しました。時折寒い日もあったことから活着は平年よりやや遅れ気味で、初期生育は葉齢は平年並みですが、草丈はやや長く、茎数はやや少なく生育が緩慢となっています。

また、急激な気温と水温の上昇とともに藻類、表層剥離や一部ワキ（ガス害）が発生しているほ場があります。そのようなほ場では、一旦落水・間断かん水などにより、ガス抜き・酸素供給を行い、根の健全化を図りましょう。

ハナエチゼンは間もなく幼穂形成期、その他の品種は分けつ盛期となります。梅雨時期の管理となりますが、水管理による分けつ促進や適期に中干しを実施するなど、有効茎確保に努めましょう。



※データ観測地点：斐川 ※平年値：2003～2022年の斐川の平均

2.生育調査結果

品種名	移植日	調査日	調査地点	株/坪 (株間)	茎数 (本/株)	茎数 (本/m ²)	草丈 (cm)	※葉色 (葉色板)	葉齢
ハナエチゼン	4/24	6/8 (+45)	出東	50 株 (21 cm)	15.2	241.3	33.6	39.7 (5.0)	9.5
つや姫	5/8	6/8 (+31)	出東	45 株 (24 cm)	5.4	72.7	23.8	39.7 (5.0)	6.3
つや姫	5/10	6/8 (+29)	出東	50 株 (21 cm)	9.7	154.0	30.1	42.6 (5.6)	6.2
つや姫	5/10	6/8 (+29)	出東	50 株 (21 cm)	10.7	169.8	30.9	41.7 (5.4)	6.3
コシヒカリ	5/14	6/8 (+25)	直江	50 株 (21 cm)	5.8	92.1	32.7	37.9 (4.7)	7.1
きぬむすめ	5/19	6/8 (+20)	出西	60 株 (18 cm)	5.5	101.9	30.1	32.5 (3.6)	5.7
きぬむすめ	5/19	6/8 (+20)	出西	60 株 (18 cm)	5.9	109.3	32.9	32.2 (3.5)	5.6
きぬむすめ	5/21	6/8 (+18)	莊原	50 株 (21 cm)	3.1	49.2	28.3	30.9 (3.3)	4.4

※葉緑素計による値: 平均値×0.2-2.9=葉色板の数値

【全品種共通】

気温の高低差も激しく、時折寒い日があったことから茎数は少なく生育は緩慢。
葉齢は平年並み、草丈はやや長く、茎数はやや少ない、葉色はやや淡い。

【ハナエチゼン】

平年に比べ、茎数はやや少ない。茎数を確認し、中干しを実施する。
葉色・幼穂を確認し、適期に穂肥を施用する。(6月20日頃幼穂形成期になる見込み)

【つや姫】

平年に比べ茎数は少ない。ほ場によって藻類の発生により生育抑制を受けている。
平年に比べ、中干し開始時期が遅れる見込み。茎数を確認する。

【コシヒカリ】

平年に比べ茎数は少ない。
平年に比べ、中干し開始時期が遅れる見込み。茎数を確認する。

【きぬむすめ】

葉齢は平年並み、草丈は長く、茎数は少ない。
これから茎数が増加してくるので中干しの時期を逃さないようにする。

3.水管理

○ワキ（土壌還元）対策

稲わらや有機物を分解する微生物の活動により酸素が消費され、「ワキ」と呼ばれるガスが発生します。ワキの程度が強いと土壌中の酸素が少ない還元状態となります。

還元が進行して強還元状態になった水田では、根に有害な硫化水素や温室効果ガスのメタンが発生します。

ワキが発生した水田では、足を踏み入れると気泡が生じ、土を手にとってにおいを嗅ぐと温泉の硫黄のようなにおいがします。また、水稻の葉身に下葉枯れや赤枯れ症状がみられます。

下表を参考に田の状況を確認し、根の健全化を図りましょう。

表：ワキの程度区分と対策

ワキの程度	田の状況	生育への影響	対策
稀	水田に足を踏み入れても気泡の発生なし	なし	—
少	水田に足を踏み込むとわずかに気泡の発生が見られる	なし	—
中	水田に足を踏み込むと気泡の発生が多い	根の活力低下	用水の入れ替え
多	水田に足を踏み込むと盛んに気泡を発生する	根張り不良	軽い落水と用水の入れ替え
甚	晴天時自然に気泡を発生し音が聞こえる。歩くと著しく気泡を発生	根の伸長阻害 地上部黄化	夜間落水 間断かん水



ワキによる下葉枯れ



田に足を踏み込むと気泡が発生

○藻類(アオミドロ)・表層剥離対策

気温の上昇に伴い藻類(アオミドロ)の発生が見受けられます。発生量が多いと、水温や地温の低下、苗のなぎ倒し等により初期生育を抑制することがあります。

アオミドロは以下の条件が揃うと増殖する傾向にあります。

- ①地力が高い(土中の有機物や窒素、リン酸が多い場合に多発)
- ②水温が生育に適している(水温が20～25℃程度になると増殖する)
- ③日射量が多い(日照時間が長くなると光合成量が増加する)

対策

- ①一時的な間断かん水（水の入替え）により軽く干し土壌表面に落着かせる
- ②除草剤の土壌処理層が形成後された後は、浅水管理(2～3cm程度)とする
(深水にしていると藻類の発生密度が高まり苗のなぎ倒しの原因となる)
- ③発生量が多い場合は藻類(アオミドロ)に登録のある除草剤「モゲトン粒剤」を散布する
(注)モゲトン粒剤は、「つや姫」・「きぬむすめ特別栽培米」では1回のみ使用可能。



藻の発生量が多いほ場



藻による苗のなぎ倒し

4.中干し

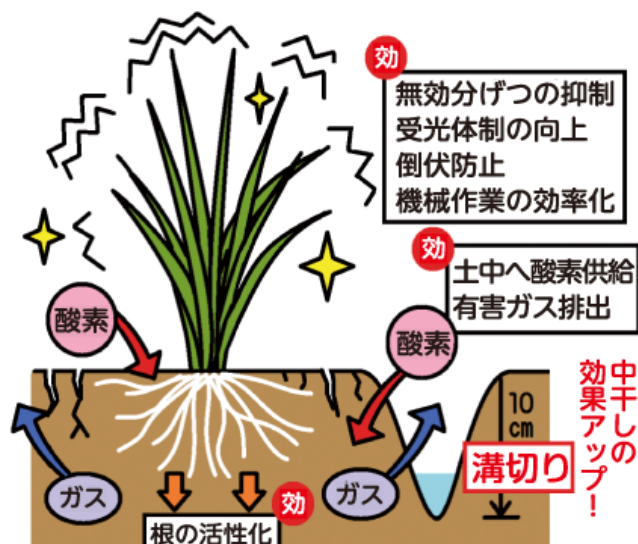
○中干しの効果

近年、斐川地域では茎数が増加し過ぎて過繁茂となり、葉身の受光態勢を悪くし、出穂後の多雨・寡照も相まって、登熟不良による網下米の増加と収量減が顕著となっています。また、茎が細くなって倒伏しやすくなることから、倒伏するほ場も増えています。このような状況からも、根の健全化と無効分げつを抑える「中干し」は最も重要な作業といえます。

土壌を乾かすと、余分な肥料窒素の吸収が抑えられ、茎数の過剰な増加を防ぎます。また、土壌中に酸素を供給することで、根は活性が高まり下層へ多く伸長するので倒伏しにくくなります。さらに、土壌が硬くなるとその後の作業や、コンバイン収穫も楽になります。

目標穂数の8～9割程度の茎数を確保したら、速やかに中干しを開始しましょう。

近年は、温暖化の影響で気温が高く茎数増加の日数も早くなっているため、中干しの適期を逃さないように注意しましょう。



○中干し開始時期

品種	茎数 (1株当り)
コシヒカリ	17本
つや姫	18～20本
きぬむすめ	18～20本

※5月上旬の田植え→目安:田植え後40～45日

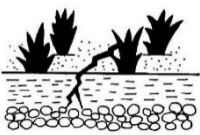
※5月中旬以降の田植え→目安:田植え後35～40日

植付け株数からみた品種別の平均1株目標穂数

株数／坪	60株	50株	45株
コシヒカリ	19	22	25
つや姫	19	23	26
きぬむすめ	18	22	25

60株＝18cm、50株＝21cm、45株＝24cm (2～3本植えとして)

○中干しの目安

	中干し期間	中干しの程度	
排水が良好なほ場	5～7日	田面が軽くひび割れる程度	
排水が悪いほ場	7～10日	田面が強くひび割れ、靴が汚れない程度	

※降雨が続く場合は中干しを長めに実施する。

○中干しの注意点

中干しが強すぎて土壌に大きなひび割れができると、逆に根が切断されて悪影響を及ぼします。また、中干し開始が早すぎると茎数不足による収量減・遅れると品質低下の原因となります。

基肥一発型肥料の場合、長期間の中干しをすると肥効が変化する場合があります。極端な中干しは避けてください。

○溝切り

中干し前後の水管理をスムーズに行うことができる有効な手段です。

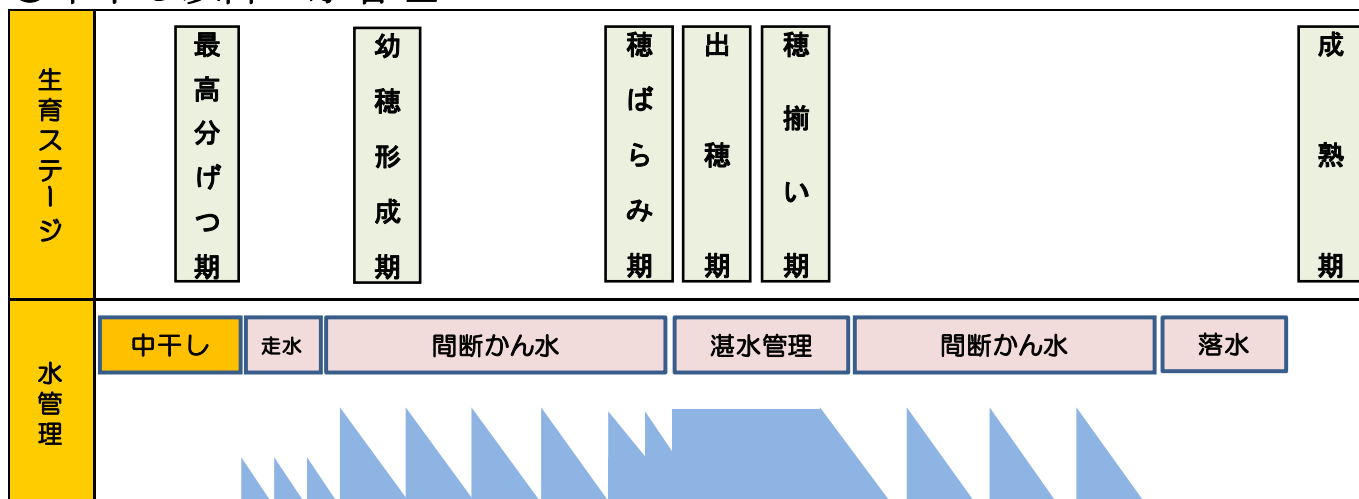
専用の付属品や機械が必要であり手間のかかる作業ではありますが、一手間かけることにより今後の管理が容易となります。

○ケイ酸質資材の施用（6月中下旬頃）

ケイ酸は健全な稲体をつくるために重要な養分です。稲の茎葉は硬くなり、いもち病菌をはじめとした病原菌の進入を防ぎ、耐倒伏性も高くなります。

品目	施用量	施用時期	備考
けい酸加里	20～30 kg/10 a	出穂前 35～45 日頃 (6 月中下旬 ～7 月上旬)	溶けにくいのため 中干し前の施用
スーパーケイソープラス			溶けやすいため 中干し後の施用
けい太くん	20 kg/30 a		水口流し込み施用

○中干し以降の水管理



【水管理イメージ図】

○中干し終了後は、急激に入水させると根傷みの原因となるため走り水を行ってから出穂期まで間断かん水を継続し、新鮮な水の入替えやガス抜きを行って根の活性化を促しましょう。

間断かん水とは

水を浅く張る → 自然に減水 → 2～3日干す → 水を浅く張る

○出穂期から穂揃い期は最も水が必要な時期になるため湛水管理を行きましょう。

○出穂期から穂揃い期に強風が吹く場合や、フェーン現象が心配される場合は深めに水をはり、稲体を守りましょう。

○穂揃い期以降は、間断かん水を行きましょう。間断かん水の期間は出穂後25日は必要です。根の活力を維持するとともに収穫に近づくにつれて、かん水の回数を減らし、収穫に備えて土壌を少しずつ固めていきましょう。

○落水時期は収穫の7日前を基本としましょう。

玄米の大きさが決まるまでには、出穂してから約4週間かかります。

概ね最初の1週間で開花・受精、次の1週間で玄米の長さが決まり、その次の1週間で玄米の幅が決まります。最後の1週間で厚みが決まるため、早く落水した田んぼの米は最後の厚みが十分でなく、粒厚の薄い米になってしまいます。

登熟期間の水管理は湛水状態にするのではなく、出穂後は飽水（ほうすい）管理（水深3～5cm程度にかん水し、足跡に水が残る程度の自然落水の繰り返し）を行い、地固めをしながら玄米を太らせます。



田面の足型に水が残る程度には水分を保つ（飽水管理）

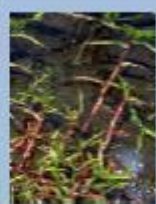
5.残草対策

田植え後1ヵ月近く経過すると、気温・地温も上昇し一発除草剤を散布していても、ほ場によっては雑草が発生し始めます。

除草剤の効果が不安定になる要因としては、田植え後の豪雨によるオーバーフローや日常の水管理、ほ場の凹凸など様々です。また、昨年雑草が多発したほ場では、埋土種子や塊茎の密度が高く、雑草の発生が多くなる可能性があります。

田植時期に強風の日が多く、田植え同時処理等で除草剤散布後に水が偏り田面が露出したほ場は特に注意が必要です。

《町内で主に問題となる雑草》

ノビエ	ホタルイ	クログワイ	オモダカ	イボクサ	クサネム
					
一年生 イネ科 種子繁殖	一年生 カヤツグサ科 種子繁殖	多年生 カヤツグサ科 塊茎繁殖	多年生 オモダカ科 塊茎繁殖	一年生 ツユクサ科 種子繁殖	一年生 マメ科 種子繁殖

《主な中・後期除草剤と特長》

区分	薬剤名	特長
中・後期 除草剤	ウィードコア1キロ粒剤	○すばやい効果発現 ○4葉期のノビエと大きな広葉雑草に優れた効果
	ロイヤント乳剤	【新規採用】 ○イボクサ・クサネムに優れた効果とすばやい効果発現 ○5葉期のノビエと大きな広葉雑草に優れた効果 ○散布2時間後の雨でも効果発揮
	レプラス1キロ粒剤	○4つの優れた除草成分を合理的に配合
	レプラスジャンボ	残草しやすいホタルイ・クログワイ・ノビエ・オモダカに強い成分を混合
	クリンチャー1キロ粒剤	○高葉齢のノビエに高い除草効果を示す EWは、ノビエ6葉期まで有効(展着剤加用)
	クリンチャージャンボ	○広葉雑草には効果がない
	クリンチャーEW	○落水またはできるだけ浅水状態で散布する
	トドメMF1キロ粒剤	○高葉齢のノビエに高い除草効果を示す 乳剤は、ノビエ7葉期まで有効(展着剤不要)
	トドメMF乳剤	○2週間程度の土壌処理効果(残効性)を示す ○除草効果の発現が早く、枯れ上がりに優れる
	ノミニー液剤	○イボクサ・クサネムに優れた効果を示す
	バサグラン粒剤	○クログワイ、オモダカなど難防除雑草に高い効果を発揮する ○イネ科雑草(ノビエ)には効果がない
	バサグラン液剤	○落水またはできるだけ浅水状態で散布する
	クリンチャーバスME液剤	○茎葉散布で発芽後から5葉期までのノビエを枯殺する ○生育の進んだ広葉雑草や多年生雑草に対しても、高い効果を示す
	トドメバスMF液剤	○高葉齢のノビエに卓効のメタミホップと広葉雑草に効果の高いベンタゾン を配合した茎葉処理除草剤 ○生育の進んだ各種雑草に対して高い効果が期待できる ○除草効果の発現が早く、枯れ上がりに優れる
	モゲトン粒剤	○藻類の専用除草剤 ○晴天日の朝に散布すると効果が早く現れる

P-12、13 に中・後期除草剤一覧を掲載していますので、確認のうえ適期散布に努めましょう。

6.穂肥の施用

品種	肥料名	施用量	施用時期	備考(目安)
ハナエチゼン	燐加安 403	1 回目 15 kg	幼穂長 1～2 mm (出穂 25 日前)	6 月 20 日頃
		2 回目 15 kg	1 回目の 7～10 日後	

※葉色が褪めた場合(葉色板 4.0 以下)、幼穂長に関係なく早めに施用する。

※高度化成 17-0-17 は、10 kg(1 回目)+10 kg(2 回目)の合計 20 kg

※硫安入 NP 化成は、8 kg(1 回目)+8 kg(2 回目)の合計 16 kg

品種	肥料名	施用量	施用時期	備考(目安)
つや姫	げんき 2 号	20 kg	幼穂長 1～2 mm (出穂 25 日前)	5 月上旬植え 7 月 1 日頃

※「げんき 2 号」以外の肥料は使用できません。

※基肥一発型肥料の場合、原則、穂肥の必要はありません。

但し、幼穂形成期(7 月上旬)に葉色が極端に褪めた(葉色板 4.0 以下)場合、穂肥の必要があります。

「つや姫」は、特別栽培米基準の範囲内(化学肥料の窒素成分量合計が 4 kg/10a 以下)となるよう計算して施用する必要がありますので、穂肥を検討される方は営農第一課までご相談ください。

品種	肥料名	施用量	施用時期	備考(目安)
コシヒカリ	燐加安 403	1 回目 10 kg	幼穂長 5 mm (出穂 20 日前)	5 月中旬植え 7 月 10 日頃
		2 回目 10 kg	1 回目の 7～10 日後	

※上記施用量は基準量です。下記の施用量の目安を参考に茎数と葉色を確認し、施用量を調整して下さい。

※高度化成 17-0-17 は、10 kg を、7 月 15 日頃(出穂 15 日前)に施用する。

※硫安入 NP 化成は、8 kg を、7 月 15 日頃(出穂 15 日前)に施用する。

○コシヒカリ燐加安 403 施用量の目安 (10a)

葉色 (葉色板)	茎数 (1 株当り)	穂肥 1 回目	穂肥 2 回目
4.0 未満	20 本未満	10 kg	10 kg
	20 本以上	無施用	15 kg
4.0 以上 4.5 未満	—	無施用	15 kg
4.5 以上 5.0 未満	—	無施用	10 kg
5.0 以上	—	無施用	無施用

倒伏防止には・・・

○第 4、5 節間の伸びる出穂 30～20 日前の肥効をおさえる。

茎数が多く葉色が濃い場合は、1 回目の穂肥の施用時期を基準より遅らせたり、施用量を減らすなど工夫しましょう。

○倒伏軽減剤：□ミカ粒剤 (2～3kg/10a、出穂 25～10 日前)

上位節間の伸長を抑制し倒伏軽減効果があります。

品種	肥料名	施用量		施用時期	備考(目安)
きぬむすめ	燐加安 403	1 回目	10～15 kg	幼穂長 5 mm (出穂 20 日前)	5 月中旬植え:7 月 20 日頃 5 月下旬植え:7 月 25 日頃
		2 回目	15 kg	1 回目の 7～10 日後	

※6 月下旬～7 月上旬に葉色が褪めた場合(葉色板 4.0 以下)、つなぎ肥(燐加安 403:10 kg)施用する。

※上記施用量は基準量です。下記の施用量の目安を参考に葉色を確認し、施用量を調整して下さい。

※高度化成 17-0-17 は、10 kg(1 回目)+10 kg(2 回目)の合計 20 kg

※硫安入 NP 化成は、8 kg(1 回目)+8 kg(2 回目)の合計 16 kg

※きぬむすめ特別栽培米の場合、「げんき」を施用する。

○きぬむすめ燐加安 403 施用量の目安 (10a)

葉色 (葉色板)	穂肥 1 回目	穂肥 2 回目
4.0 未満	15 kg	15 kg
4.0 以上 5.0 未満	10 kg	15 kg
5.0 以上 5.5 未満	無施用	10 kg
5.5 以上	無施用	無施用

○基肥一発型肥料 (ツバメコート SLH20、ふるさと 588) の場合

7 月以降の気温が高く、葉色が褪めた(葉色板 4.0 以下)場合、追肥が必要になります。

7 月下旬～8 月上旬頃に燐加安 403 10～15kg/10 施用

穂肥施用時の注意点

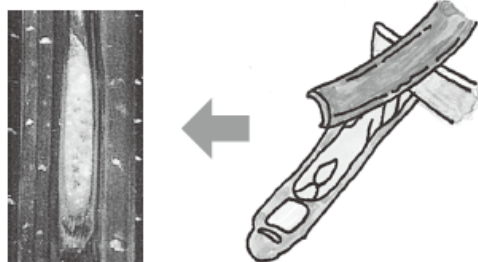
○施用する前に、幼穂長を確認しましょう。

【幼穂の確認方法】

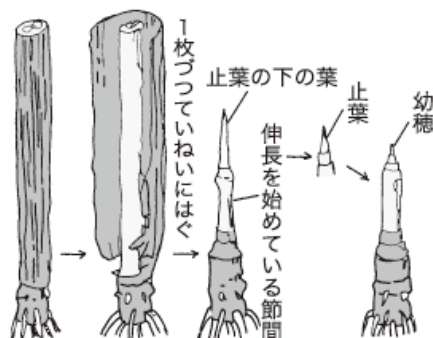
平均的な株の一番背の高い茎を根元から抜き取る

(1) カッターなどで割る

(茎をうすく削いでゆく)



(2) 葉さやをむく



幼穂の確認方法

7.病虫害防除

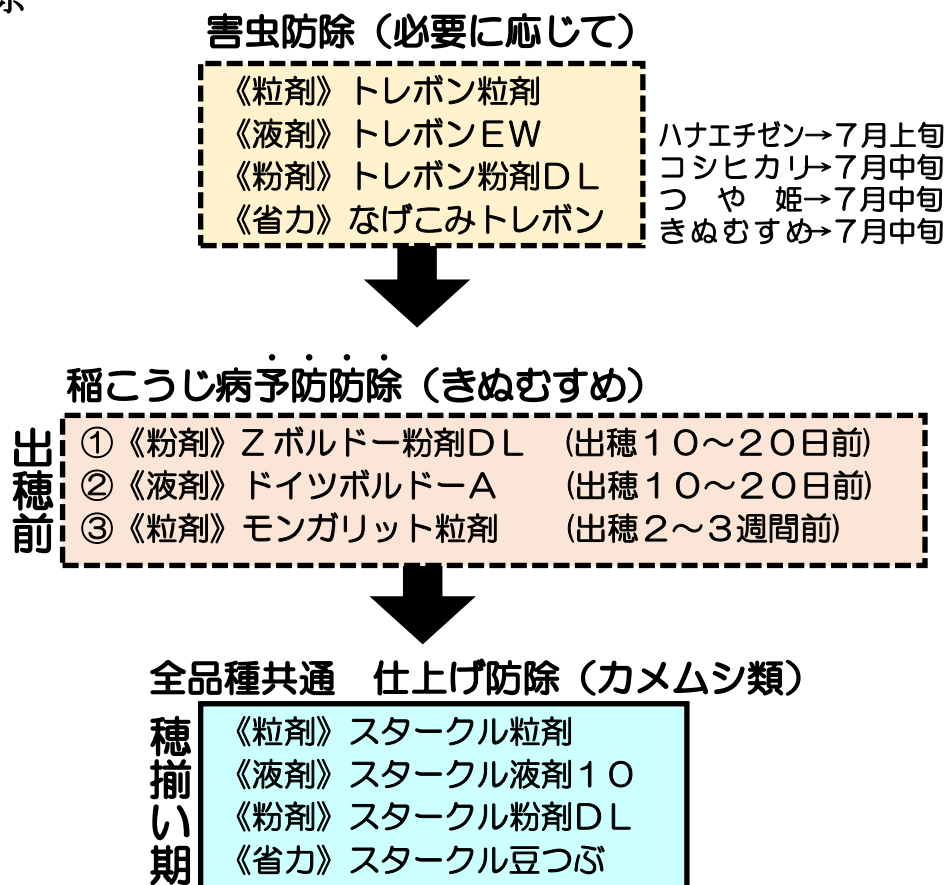
箱処理剤の施用によりイネミズゾウムシなどの初期害虫はある程度抑えられています。

いもち病は、初発が6月中旬～下旬となり、気象条件は低温・小雨・少照で発生します。

島根県での発病は6月中～下旬頃で置き苗が感染源となることが多くなっていますので、置き苗は早急に除去して下さい。

紋枯病は、茎数増加と高温多湿で発生します。特に①昨年多発したほ場②箱処理剤に紋枯病のないものを使用したほ場③過繁茂(特にきぬむすめ)のほ場では注意が必要です。

○本田防除



※突発的な病虫害が発生した場合、P-15を参考に随意防除を実施して下さい。

斐川町一斉草刈運動の実施について

ウンカ・カメムシの生息する雑草地を一斉駆除します。

振興区・自治会一体となった取り組みをお願いいたします。

6月11日（日）～6月25日（日）の15日間

病害虫防除のポイント

○カメムシ類

ヒエが多いと発生しやすく、吸汁被害による斑点米は「着色粒」に区分され等級格下げ要因となる。畦畔などの雑草が住みかとなるため出穂までに水田周辺の草刈の徹底が必要。

出穂 4～5 日頃の乳熟期から被害が多くなるため穂揃い期に防除を行う。

3 年産より町内でもイネクロカメムシの発生も確認され、食害による白穂や株枯れ、不稔粒の増加による減収被害を受けた。



ホソバカメムシ



アカシガスカメ



クモバカメムシ



トゲシロホシカメムシ



イネクロカメムシ

○いもち病

穂いもちの発生は出穂期の気象に左右されることが多い。
出穂期である 7 月下旬から 8 月が低温、多雨の年には発生が多い。

近年町内においても、穂いもちが発生している。穂いもちは減収に繋がるため、防除は葉いもちの発生を抑制することが重要。

置き苗が感染源となっているため置き苗は早急に除去する。



葉いもち



穂首いもち

○紋枯病

菌核を形成し越冬するが低温にも強いので越冬能力が高い。このため、発生したほ場では次年産でも発生が懸念される。高温多湿の年に発生が多く、株元の風通しが悪いと甚大な被害につながる。対策として、

①予防効果のある箱処理剤を選定する

②過繁茂とならないように初期生育を抑制する等がある。

極端な窒素肥料の多用を避ける。直播栽培などで注意が必要。



紋枯病発病株

○稲こうじ病

被害わらや種籾で越冬した病原菌が第 1 次伝染源となる。

黒い菌核が発生してから薬剤防除の効果はなく予防防除のみとなる。

(防除剤は P-15 参照) 発病する条件は以下のとおり

①過去に多発したほ場

②生育後半の窒素が多いとき

③出穂前 20 日間に低温多雨の気象条件時



稲こうじ病

農薬適用一覧（移植水稻）

【中後期除草剤】

薬剤名	適用雑草名	使用時期	使用量 (10a 当)	使用 回数	成分 数
ウィードコア 1 キロ粒剤	一年生雑草、 キシウスズメノヒエ、 多年生広葉雑草	移植後 7 日～ヒエ 4 葉期 ただし、収穫 60 日前まで	1kg	2 回 以内	3
レブラス 1 キロ粒剤	水田一年生雑草、 マツバ、ホタルイ、ウリカワ、ミズガヤツリ、 ヘラオモダカ、ヒルムシロ、セリ、オモダカ、 クログワイ、コウキヤガラ、シズイ	移植後 14 日～ヒエ 4 葉期 ただし、収穫 60 日前まで	1kg	1 回	4
レブラス ジャンボ	水田一年生雑草及び 多年生広葉雑草	移植後 14 日～ヒエ 4 葉期 ただし、収穫 60 日前まで	小包装(パック) 10 個(400g)	1 回	4
ロイヤント乳剤 ※注①	一年生広葉雑草、ヒエ、 マツバ、ミズガヤツリ、ウリカワ、セリ、 アゼガヤ、オモダカ、エゾノサヤヌカガサ、 シズイ、ナガエツルノゲイトウ	移植後 20 日～ヒエ 5 葉期 但し、収穫 45 日前まで	薬量:200ml 希釈水量: 25～100L	2 回 以内	1

※注①ロイヤント乳剤は水田畦畔への登録もあります。

【藻類（アオミドロ・アミミドロ）対策】

薬剤名	適用雑草名	使用時期	使用量 (10a 当)	使用 回数	成分 数
モゲトン粒剤	藻類(アオミドロ、アミミドロ)、 ウキ草類	藻類、ウキ草類の発生始～発生盛期 但し、収穫 45 日前まで	2～3kg	3 回 以内	1

(注)「つや姫」・「きぬむすめ特別栽培米」では 1 回のみ使用可能。

【イボクサ・クサネム対策】

薬剤名	適用雑草名	使用時期	使用量 (10a 当)	使用 回数	成分 数
ノミニー液剤	クサネム	移植後 30 日～クサネムの草丈 40cm まで 但し、収穫 60 日前まで	薬剤:50～100ml 水:100L	1 回	1
	イボクサ	移植後 30 日～イボクサの茎長 30cm まで 但し、収穫 60 日前まで			

※落水散布またはごく浅く湛水して散布（3～4 日）は入水させない。

薬剤名	適用雑草名	使用時期	使用量 (10a 当)	使用 回数	成分 数
クリンチャー 1キロ粒剤	ノビエ、 キシュウスズメノヒエ、アセガヤ	移植後 7 日～ノビエ 4 葉期 但し、収穫 30 日前まで	1kg	2 回 以内	1
		移植後 25 日～ノビエ 5 葉期 但し、収穫 30 日前まで	1.5kg		
クリンチャー ジャンボ	ノビエ、 キシュウスズメノヒエ、アセガヤ	移植後 7 日～ノビエ 4 葉期 但し、収穫 30 日前まで	小包装(パック) 20 個(1kg)	2 回 以内	1
		移植後 25 日～ノビエ 5 葉期 但し、収穫 30 日前まで	小包装(パック) 30 個(1.5kg)		
クリンチャーEW (展着剤加用)	ノビエ、 キシュウスズメノヒエ、アセガヤ	移植後 20 日～ノビエ 6 葉期 但し、収穫 30 日前まで	薬剤:100ml 水:25～100L	2 回 以内	1
トドメ MF 1 キロ粒剤	ノビエ、 キシュウスズメノヒエ、アセガヤ	移植後 14 日～ノビエ 5 葉期ま で但し、収穫 50 日前まで	1 kg	3 回 以内	1
トドメ MF 乳剤 (展着剤不要)	ノビエ、 キシュウスズメノヒエ、アセガヤ	移植後 14 日～ノビエ 7 葉期ま で但し、収穫 50 日前まで	薬剤:200ml 水:25～100L	2 回 以内	1
バサグラン粒剤 (ナトリウム塩) ※注②	水田一年生雑草(イネ科を除く)、 マツバ、ホタルイ、ウリカワ、ミズガヤツリ、 ヘラオモダカ、オモダカ、クログワイ、 エゾノサヤヌカゲサ、シズイ	移植後 15 日～55 日まで 但し、収穫 60 日前まで	3～4kg	1 回	1
バサグラン液剤 (ナトリウム塩)	一年生雑草(イネ科を除く)、 マツバ、ホタルイ、ウリカワ、オモダカ、 ミズガヤツリ、ヘラオモダカ、クログワイ、 コウキヤガラ、エゾノサヤヌカゲサ、シズイ、 クサネム	移植後 15 日～55 日まで 但し、収穫 50 日前まで	薬剤:500～ 700ml 水:70～100L	2 回 以内	1
クリンチャー バスME液剤 (展着剤不要)	一年生雑草、マツバ、ホタルイ、 ウリカワ、ミズガヤツリ、ヘラオモダカ、 オモダカ、セリ、クログワイ、コウキヤガラ、 シズイ、キシュウスズメノヒエ	移植後 15 日～ノビエ 5 葉期 但し、収穫 50 日前まで	薬剤:1,000ml 水:70～100L	2 回 以内	2
トドメバス MF 液剤 (展着剤不要)	一年生雑草、 及び 多年生雑草	移植後 15 日～ノビエ 6 葉期 但し、収穫 50 日前まで	薬剤:1,000ml 水:70～100L	2 回 以内	2

※注②落水状態(足跡に水が残っている状態)もしくは、浅水状態(雑草が水面上に出る状態)にして散布。

「つや姫」後期除草剤の注意点(特別栽培米基準)

※後期除草剤は、クリンチャー(1 kg粒剤・ジャンボ・EW)、バサグラン(粒剤・液剤)

クリンチャーバスME液剤の中から原則 1 剤を 1 回のみ使用できます。

ただし、下記の組合せに限り 2 回の散布が可能です。

1回目	2回目
クリンチャー(粒・液・ジャンボ)	バサグラン(粒・液)
または	
バサグラン(粒・液)	クリンチャー(粒・液・ジャンボ)

【本田防除剤】（殺虫剤）

薬剤名	適用病害虫名	使用量 (10a 当)	使用時期 (収穫前)	使用 回数	成分 数
トレボン粒剤	イネミズゾウムシ、イネトノオイムシ、 イネゾウムシ、イネヒメハモグリバエ、 イナゴ類、ウンカ類、ツマグロコバエ	2～3kg	21 日前まで	3 回 以内	1
	ニカメイチュウ第1世代	3kg			
トレボンEW	ウンカ類、ツマグロコバエ、イナゴ類、 イネトノオイムシ、カメムシ類、 イネミズゾウムシ、コブノメガ	1000 倍 60～150L	14 日前まで	3 回 以内	1
	ウンカ類 ツマグロコバエ	300 倍 25L			
トレボン粉剤DL	イネツトムシ	4kg	7 日前まで	3 回 以内	1
	カメムシ類、イネミズゾウムシ成虫 ツマグロコバエ、ウンカ類、コブノメガ アザミウマ類、イナゴ類、イネトノオイムシ ニカメイチュウ	3～4kg			
	イネヒメハモグリバエ、フタオビコヤガ	3kg			
なげこみトレボン	イネミズゾウムシ、イネトノオイムシ	水溶性容器 4～6 個(200～300ml)	5 葉期以降 21 日前まで	3 回 以内	1
	ウンカ類、ツマグロコバエ ニカメイチュウ第1世代	水溶性容器 10 個(500ml)			
	イナゴ類、イネクロカメムシ	水溶性容器 6～10 個(300～500ml)			
スタークル粒剤	ウンカ類、ツマグロコバエ、ニカメイチュウ、 イネトノオイムシ、カメムシ類、 イネミズゾウムシ	3kg	7 日前まで	3 回 以内	1
スタークル液剤10	ツマグロコバエ、カメムシ類、ウンカ類	1,000 倍 60～150L	7 日前まで	3 回 以内	1
	カメムシ類、ウンカ類	300 倍 25L			
スタークル豆つぶ	カメムシ類	250g	7 日前まで	3 回 以内	1
	ウンカ類、ツマグロコバエ	250～500g			
スタークル粉剤DL	ウンカ類、ツマグロコバエ、カメムシ類、 イナゴ類、イネトノオイムシ、ニカメイチュウ、 フタオビコヤガ	3 kg	7 日前まで	3 回 以内	1

※「つや姫」・「きぬむすめ特別栽培米」は上記の農薬のみ使用できます。

即ち、トレボン（粒剤・液剤・粉剤・省力）、スタークル（粒剤・液剤・粉剤・省力）は、それぞれ1回のみ使用可能です。

【随意防除】

薬剤名	適用病害名	使用量 (10a 当)	使用時期 (収穫前)	使用 回数	成分 数
アミスターエイト	いもち病、紋枯病 穂枯れ(ごま葉枯病菌)	1000～1500 倍 100～200L	14 日前まで	3 回 以内	1
	稲こうじ病、穂枯れ(すじ葉枯病菌)、 変色米(カーブラリア菌)、変色米(エピコッカム菌)、 変色米(アルタナリア菌)	1000 倍 100～200L			
	いもち病、紋枯病	300 倍 25L			
リンバー粒剤	紋枯病 疑似紋枯症(褐色菌核病菌) 疑似紋枯症(赤色菌核病菌)	3～4kg	30 日前まで	2 回 以内	1
ブラシンプロアブル	いもち病、稲こうじ病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、内穎褐変病、墨黒穂病、変色米(アルタナリア菌)、変色米(エピコッカム菌)、変色米(カーブラリア菌)、穂枯れ(ごま葉枯病菌)、褐条病	1000 倍 60～150L	7 日前まで	2 回 以内	2
		300 倍 25L			
バリダシン液剤5	紋枯病、もみ枯細菌病 疑似紋枯症(赤色菌核病菌) 疑似紋枯症(褐色菌核病菌) 疑似紋枯症(褐色紋枯病菌)	1000 倍 60～150L	14 日前まで	5 回 以内	1 (カウン ト0)
	紋枯病	300 倍 25L			
バリダシン粉剤DL	紋枯病 疑似紋枯症(赤色菌核病菌) 疑似紋枯症(褐色菌核病菌) 疑似紋枯症(褐色紋枯病菌)	3～4kg	14 日前まで	5 回 以内	1 (カウン ト0)
スミチオン乳剤	ニカメイチュウ第1世代	1000～2000 倍	21 日前まで	2 回 以内	1
	ニカメイチュウ第2世代、 サンカメイチュウ第3世代	800～1000 倍			
	ヒメビウカ、カメムシ類、イネツムシ、イネシガラセン チュウ、イネドロオムシ、アブラムシ類、アワヨトウ	1000 倍			
	イネハモグリバエ	1000～2000 倍			
	イネヒメハモグリバエ	2500 倍			
	フタオビコヤガ	2000～4000 倍			
	ニカメイチュウ、カメムシ類	300 倍			
パダン粒剤 4	ニカメイチュウ、イネツムシ、コブノメイガ、 フタオビコヤガ、アザミウマ類	3～4 kg	30 日前まで	6 回 以内	1
	サンカメイチュウ第3世代、 スクミンコガイ(食害防止)	4 kg			

【稲こうじ病防除】

薬剤名	適用病害名	使用量 (10a 当)	使用時期 (収穫前)	使用 回数	成分 数
Zボルドー粉剤DL	稲こうじ病	3～4kg	出穂 10 日前 まで(※)	—	1 (カウン ト0)
	墨黒穂病	4kg			
ドイツボルドーA	稲こうじ病、墨黒穂病	2000 倍 60～150L	出穂 10 日前 まで(※)	—	1 (カウン ト0)
モンガリット粒剤	紋枯病、稲こうじ病、墨黒穂病 疑似紋枯症(褐色紋枯病菌)、疑似紋枯症(赤色 菌核病菌)、疑似紋枯症(灰色菌核病菌)、 疑似紋枯症(褐色菌核病菌)	3～4kg	45 日前まで (※※)	2 回 以内	1
	穂枯れ(ごま葉枯病菌) 穂枯れ(すじ葉枯病菌)	4kg			

1.稲こうじ病は黒い菌核が発生してから薬剤防除の効果はありません。

2.稲こうじ病は防除適期が限られていて、早く散布しても遅すぎても効果が劣ります。

粉剤・液剤(※)は出穂 10～20 日前、粒剤(※※)は出穂 2～3 週間前に散布する。

3.銅剤(Z ボルドー粉剤 DL・ドイツボルドーA)を使用する場合は、出穂期以降は稲に薬害を生じやすいため、出穂 10 日前以降の使用は避けること。

【倒伏軽減剤】

薬剤名	使用目的	使用量(10a)	使用時期	使用回数
ロミカ粒剤	節間短縮による倒伏軽減	2～3 kg	出穂 25～10 日前まで	1 回

【無人航空機（ドローン） 薬剤】

薬剤名	適用病害虫雑草名	希釈倍数 使用量	散布液量 (10a)	使用時期	使用回数
クリンチャーEW (展着剤加用)	バエ	100ml	0.8～1.6L	移植後 20 日～ ノビエ 4.5 葉期 但し、収穫 30 日前まで	2 回 以内
トレボンエアー	イナゴ類、ウンカ類、 カメムシ類、コブノメイガ、 ツマグロヨコバイ、フタオビコヤガ	8 倍	0.8L	収穫 14 日前まで	3 回 以内
スタークル液剤 10	ウンカ類、カメムシ類	8 倍	0.8L	収穫 7 日前まで	3 回 以内
	ウンカ類、ツマグロヨコバイ	16 倍	1.6L		
	ウンカ類	30 倍	3L		
スミチオン乳剤	ニカメイチュウ、カメムシ類	8 倍	0.8L	収穫 21 日前まで	2 回 以内
アミスターエイト	いもち病、紋枯病	8 倍	0.8L	収穫 14 日前まで	3 回 以内
バリダシンエアー	紋枯病	8 倍	0.8L	収穫 14 日前まで	5 回 以内
ブラシンプロアブル	いもち病、ごま葉枯病 もみ枯細菌病、内穎褐変病、 墨黒穂病、稲こうじ病、 変色米(アルタナリア菌)、 変色米(エピコッカム菌)、 変色米(カーブラリア菌)、 穂枯れ(ごま葉枯病菌)、褐条病	8 倍	0.8L	収穫 7 日前まで	2 回 以内
ビームエイト スタークルゾル	いもち病、ウンカ類、 カメムシ類、ツマグロヨコバイ	8 倍	0.8L	収穫 7 日前まで	3 回 以内

農薬使用にあたっては、必ずラベル表示（使用時期、使用量、倍率、使用回数）を確認し、適正に使用して下さい。

お問合せ先

J A しまね 斐川地区本部 営農第一課

T E L : 0853-73-9616

F A X : 0853-73-9074

メール : beikoku.hik@ja-shimane.gr.jp